F5 中学生に対する包丁の技能指導について
東京学芸大 〇回部 千恵美子 武井 洋子

目的 児童を対象とした包丁に対する研究は、従来数多く報告されているが、本研究は
中学生を対象として、家庭における包丁の使用方法および管理の実態を、生徒自身の体験、実
践などを調査し、中学校における指導施設を明確することを目的とした。

方法 対象者は中学校1学年生186名、調査期間は昭和52年4月、調査内容は①
家庭で体験する包丁の数、使用方法および管理の実態、②生徒自身の包丁の使用経験と実
態である。調査方法は集合調査法を用い、回答形式は多選択方式によった。

結果 ①生徒の家庭にある包丁の種類は8種類で、多い順にあげると、ベテナミ、鎌
型包丁、菜切り包丁、出刃包丁、牛刀である。廃業数は約2/3であるが、おもな包丁
を2つ以上持つ者は少々である。使用方法は適当といえる。2)家庭における包丁の管理状
況は、多くは父が持っている。普通、包丁は持たれ、短く期間は保管されている。3)包丁使用後の
手入れについては、大半が行わない。4)生徒が初めて包丁を使用した時期は小学校3学年で、
場所は教室、材料は野菜を切ったものが多い。5)食品の切り方は、包丁を握って持ち、
人指を指で包丁の肩の有無をもって持つ。食品を切る時によくおしゃべりをするものが多い。
6)家庭の包丁を使いやすいと評価するものは多いが、その理由はやさしいと全員をあげている。
7)家庭で包丁を使用することの有無、小学校における包丁使用についての指導の有無においては、
両者とも男子に肯定的な回答が高く、男女間における差異がみとめられ、指導上留意すべき点である。

F6 児童の切り方技能の発達—4年から6年までの追跡—
岩手大学 藤原 清水

目的 きょうりの切り方技能を手がかりに、小学校4年生普通学級の児童（男子19名、
女子21名計40名）を対象に、5年、6年と追跡調査し、発達の模様を把握すると共に、そ
れにおける要因のいくつかを解明することによって、調査分析の通通を見あたすことである。

方法 調査時期：1979.6．1～7月調査
1980.12．1～14の3回調査。第3年目は1981.6．13から7．14までの4回調査。調査内容：a．
実技テストは、きょうり（直径2～3cm、長さ15cm径27例）を材質として10分間切っ
た数で評価する。b．意図調査は切り方技能と難易・趣味・経験の有無との関係。c．
手の計測は12部位の基を計測し、切り方技能との関係をみる。d．包丁の大きさ、大きさや作業台
の高さについても乒乓球試による意識のしかたを調査する。

結果 ①学年進行に伴って技能成長は伸びる。特に4年から5年にかけての伸びが大き
く、5年から6年にかけての伸びは小さい。2) 各学年共男女間に有意な差は認めら
れない。3) 切り方に対する難易も意識と技能成長とは関連は、6年男子においてのみ認め
られ、他の学年においては認められない。4) 家庭生活経験の有無と技能成長との関係
は、各学年とも関連は認められない。5) 4年生段階で進部された包丁を使用して5年、6
年と追跡してまったが、6年では使いにくいいと答えている。作業台の高さについても恐れ
が低いと答えている。6) 手の計測部位と技能成長との関係は、成長の著しい部位と
技能成長による関係がみとめられる。